

拙話の狙いは、本討議の主題たる「経験の場」（すなわち我々の経験がそこにおいて生起する場）を心・身・土の三者に認め、心から身へ、そして更には身から土へと当該の場が漸次開かれ、拡大していく過程を経験の生起と深化として闡明せんとするところにある。

拙話は次の手順で進められる予定である（但し「予定は未定」につき、以下の行論には尚も変更の余地があることを諒とせられたい）。

（一）『善の研究』では一面において—例えばその「考究の出発点」の議論に鑑みると—純粹経験が「意識上における」直覚的事実として規定されていること、従って意識こそが経験の場たりうるものであると考えられていることを先ず確認する。ここには、「現前の意識現象とこれを意識するということとは直に同一」である点に「知識とその対象とが全く合一している」純粹経験の徴表を求める見地、換言すれば、デカルト流の意識の哲学の立場が認められる。そしてかかる立場からは—両者の表裏一体性が強調されつつも—主観と客観が峻別されることになる。すなわち西田の見るところ、前者は意識の統一作用の担い手たる〈統一するもの〉に、それに対して後者は当該作用によって〈統一されるもの〉に相当するのである。

（二）如上の区別に従えば、〈統一するもの〉としての私とは別物の他者や動植物等のみならず、他ならぬ私の身体—西田曰く、身体は「物体」の一つであり、「外界といえは[...]外界である」—もまた〈統一されるもの〉（乃至は客観）の総体たる「自然」の中に数え入れられる筈である。だが西田は他方において「自然もやはり一種の自己を具えている」旨を説き、こうした「客観」は実のところ、その各々がそれ自体〈統一するもの〉に他ならぬことを主張する。さすれば私の身体は啻に〈統一されるもの〉に止まるのではなくして、寧ろ一箇の〈統一するもの〉であり、しかも西田に従えば、その身体の「動作」は、この宇宙の万物をしてかくあらしめている「实在統一力」の発現たる「意志」の「表現」と言える。以上の議論から、次の二点を示してみたい—私の意識の根柢にあって、これを統べる「純粹経験の統一」が、如上の「宇宙の内面的統一力」に帰一するのであれば、かかる統一力の顕現（ということつまり経験の生起）の場は身体であること。そしてそのような「超個人的統一」の

働きの在り処たる身体は、これを「他人と自己とを包含したもの」であるところの「大なる自己」として解釈しうること。

(三) 最後に、『善の研究』の読解から得られる如上の身体観は、「主体的肉体」という着想に基づいて「人間の肉体」を「風土」へ拡張する和辻の試みへ、更には「身心」問題に飽き足らず、「人間が[...]身体として、そこに存在しているその場」にまで分け入らんとする西谷の「身土」の思想へと展開されうるものであることを論ずるつもりである。